

夏の町

永井荷風

青空文庫

一

枇杷びわの実みは熟じやくして百合ゆりの花はなは既に散ちりり、昼ひるも蚊あしなの鳴なく植うゑ込こみの蔭かげには、七度ななたびも色いろを變かへえるといいう盛さかりの長ながい紫陽花あじさいの花はなさえ早はやや萎しおれてしまつた。梅雨つゆが過すぎて盆芝居ぼんしばいの興行きやうも千秋楽せんしゆうらくに近きづくと誰たれも彼かれも避暑ひそくに行いく。郷里きやうりへ歸かへる。そして炎暑えんしよの明あい寂さ寞ぼくが都會かいを占領せんりやうする。

しかし自分みづかは子供こどもの時ときから、毎まい年ねんの七しち、八はち月げつをば大概たいがい何處どこへも旅行りょこうせずに東京とうきやうで費つぎしてしままうのが例れいであつた。第一だいいつの理由りゆうは東京とうきやうに生うれた自分みづかの身みには何處どこへも行くべき郷里きやうりがないからである。第二だいじには、両親りやうしんは逗子ずしとか箱根はこねとかへ家うち中ちゆうのものを連つれて行くけれど、自分みづかはその頃ころから文学ぶんがくとか音楽おんがくとかとにかく中学生ちゆうしゆうせいの身みとしては監督者かんとくしやの眼めを忍しのばねばならぬ不正ふせいの娯樂ごらくに耽ふけりたい必要ひつやうから、留守番くしゆばんという体ていのいい名義なぎぎの下もとに自らみづか辞退しして夏三月なつみつきをば両親りやうしんの眼めから遠とほざかる事ことを無上むじやうの幸福しあふとしていたからである。

たしか中学ちゆうがくを卒業そつぎやくする前まへの年としの事ことかと記憶きこする。どういいう訳わけか逗子ずしへ半月はんげつばかり行いつていた時の事ことを半紙二帖はんしじふしちゆうほどに書かいたものが、今いまだに自分みづかの手篋てばこの底そこに保存ほぜんされてある。

なるしまりゆうほく
成島柳北が仮名交りの文体をそのままに模倣したり 剽窃したりした間々 漢
詩の七言絶句を挿み、自叙体の主人公をば遊子とか小史とか名付けて、薄倖多病の才
が都門の榮華を外にして海辺の茅屋に松風を聴くという仮設的哀愁の生活をば、
いかにも稚氣を帯びた調子でかつ厭味らしく飾つて書いてある。全篇の題は紅蓼白蘋
録というので挿入した絶句の中には、

已見秋風上白蘋。

〔已に見る秋風 白蘋に上り〕

青衫又汚馬蹄塵。

青衫又た馬蹄の塵に汚る

月明今夜消魂客。

月明るく 今夜 消魂の客

昨日紅樓爛醉人。

昨日は紅樓に爛醉するの人

年来多病感前因。

年来 多病にして前因を感じ

旧恨纏綿夢不真。

旧恨 纏綿として夢真ならず

今夜水楼先得月。

今夜 水楼 先ず月を得て

清光偏照善愁人。

清光 偏えに照らす 善だ愁うの人

なぞというのがあった。

今日読返して見ると覚えす 噴飯するほどである。わずか十四、

五歳の少年が「昨日は紅楼に爛酔するの人」といつているに至っては、文字上の遊戯もまた驚くべきではないか。しかし自分は近頃十九世紀の最も正直なる告白の詩人だといわれたポオル・ヴェルレエヌの詳伝を読み、

Les 《ㄱ》 sanglots 《サングロ》 longs 《ロン》

Des 《이》 violons 《ビオロン》

De 《도》 l'automne 《ロオートオヌ》……

「秋の胡弓こきゅうの長き咽むせび泣き」という彼の有名なLa 《라》 chanson 《シャンソン》 d'automne 《ドオートオヌ》（秋の歌）の一篇の如きはヴェルレエヌが高踏派こうとうはの詩人として最も幸福なる時代の作で、その時分には妻もあり友達もあり一定の職業もあつた事を伝記の著者から教えられた。して見ると、「過ぎし日の事思おもひ出いでて泣く、」といったりあるいは末節の、「われは此処ここ彼処かしこにさまよう落葉おちば」といったのはやはり詩人の Jeux d'esprit（心の遊戯）であつたのだ。しかし自分は無論己れを一世の大詩人に比して弁解しようというのではない。唯晩年ただには Sagesse 《サッジエス》の如き懺悔ざんげの詩を書いた人にも或時はかかる事実があつたものかと思議に感じた事を語るに過ぎぬのである。

私は毎まい年ねんの暑中休暇を東京に送り馴れたその頃の事を回想して今に愉快でならぬのは

七月八月の両月をおおかわばたの水練場に送った事である。

自分は今日になつても大川の流のどの辺が最も浅くどの辺が最も深く、そして上汐下汐の潮流がどの辺において最も急激であるかを、もし質問する人でもあつたら一々明細に説明する事の出来るのは皆當時の経験の賜物である。

午後に夕立を降して去つた雷鳴の名残が遠く幽に聞えて、真白な大きな雲の峰の一面が夕日の反映に染められたまま見渡す水神の森の彼方に浮んでいるというような時分、試に吾妻橋の欄干に佇立み上汐に逆つて河を下りて来る舟を見よ。舟は大概右岸の浅草に沿うてその艚を操っているであらう。これは浅草の岸一帯が浅瀬になつていて上汐の流が幾分か緩であるからだ。しかし中洲の河沿いの二階からでも下を見下したなら大概の下り船は反対にこの度は左側なる深川本所の岸に近く動いて行く。それは大川口から真面に日本橋区の岸へと吹き付けて来る風を避けようがためで、されば水死人の屍が風と夕汐とに流れ寄るのはきまつて中洲の方の岸である。

自分が水泳を習い覚えたのは神伝流の稽古場である。神伝流の稽古場は毎年本所御舟蔵の岸に近い浮洲の上に建てられる。浮洲には一面蘆が茂つていて汐の引いた時には雨の日なぞにも本所辺の貧い女たちが蜆を取りに出て来たものであるが今では石垣を築

いた埋立地になってしまったので、浜町河岸には今以て昔のように毎年水練場が出来な
がら、わが神伝流の小屋のみは他所たしよに取払われ、浮洲に茂った蘆の葉は二度と見られぬも
のとなつた。

一ひととおり通 遊泳術の免許を取つてしまった後は全く教師の監督を離れるので、朝早く自分
たちは蘆のかげなる稽古場に衣服を脱ぎ捨て肌襦袢はだじゆばんのような短い水着一枚になって大川
筋をば汐の流に任して上流は向島下流は佃のあたりまで泳いで行き、疲れると石垣の
上に這上はいあがつて犬のように川端を歩き廻る。

濡れた水着のままよく真砂座まざござの立見たちみをした事があつた。永代えいたいの橋の上で巡査とがに咎め
られた結果、散々さんざんに悪口あつこうをついて捕えられるなら捕えて見ろといいながら四、五人一
度に橋の欄干から真逆様まつさかさまになつて水中へ飛込み、暫くして四、五間も先きの水面にぽつ
くり浮うかみ出して、一同わアいと囃はやし立てた事なぞもあつた。

泳ぐ事もできず裸体はだかで川端かわばたを横行する事も出来ぬ時節になつても、自分はやはり川好
きの友達と一緒に中学校の教場以外の大抵な時間をば舟遊びに費した。

われわれは無論ボオトも漕こいだ。しかしボオトは少くとも四、五人の人数にんずを要する上に、

一度權かゐを揃そろえて漕出こしゅせば、疲れたからとて一人勝手に止める訳には行かないので、横おうちや着くで我儘わがままな連中れんじゅうは、ずっと気楽で旧式な荷足舟にたりぶねの方を選んだ。その時分にはボオトの事をバツテラという人も多かった。浅草橋あさくさばしの野田屋のだやや築地つきじの丁字屋ちようじやから借舟かりぶねをするにしても、バツテラと荷足とは一日の借賃かりちんに非常な相違があつた。

土曜といわず日曜といわず学校の帰り掛けに書物の包を抱えたまま舟へ飛乗つてしまうのでわれわれは蔵前くらまえの水門すいもん、本所の百本杭ひやっぽんぐい、代地の料理屋だいちの棧橋さんばし、橋場の別荘の石垣、あるいはまた小松島こまつしま、鐘ヶ淵かねふち、綾瀬川あやせがわなぞの蘆の茂りの蔭に舟をつないで、代数や幾何学の宿題を考えた事もあつた。同時にまた、教科書の間に隠した『梅曆うめごよみ』や小三金五郎こさんきんごろうの叙景文をば目の当りあたに見る川筋の実景に对照させて喜んだ事も度々であつた。

かかる少年時代の感化によつて、自分は生涯たとえ如何なる激しい新思想の襲来を受けても、恐らく江戸文学を離れて隅田川すみだがわなる自然の風景に対する事は出来ないであろう。鐘ヶ淵の紡績会社や帝国大学の艇庫は自分がまだ隅田川を知らない以前から出来ていたものである。それらの新しい勢力は事実において日に日に土手や畠かわぎしや河岸や蘆の茂りを取払つて行きつつあるが、しかし何らの感化をも自分の心の上には及ぼさなかつたのだ。

黒煙こくえんを吐く煉瓦づくりの製造場せいぞうばよりも人情本の文章の方が面白く美しく、乃ち遙すなわに強い印象を与えたがためであろう。十年十五年と過ぎた今日こんにちになっても、自分は一度ひとたび竹屋橋場けはしばいまと今戸の如き地名の発音を耳にしてさえ、忽然こっぜんとして現在を離れ、自分の生れた時代よりも更に遠い時代へと思いを馳はするのである。

いかに自然主義がその理論テオリイを強しいたにしても、自分だけには現在あるがままに隅田川を見よという事は不可能である。

自然主義時代の仏蘭西文学フランスは自分にはかえって隅田川に対する空想を豊富ならしめた傾かたむきがある。

モオパッサンはその短篇中に描いたセエヌ河の舟遊びによって、漫そぞろにわれわれの過ぎ去った学生時代を意味深く回想させ、ゴンクウル兄弟が En 18... の篇中に書いた月夜ムウドンの麗うるわしい叙景は、蘆みづやなぎと水楊みづやなぎの多い綾瀬あやせあたりの風景をよろこぶ自分に対して更に新しく纖巧せんこうなる芸術的感受性を洗練せしめた。ゾラは『田園 (Aux champs)』と題する興味ある小品によって、近頃の巴里人パリーじんが都会の直ぐ外なるセエヌ河畔の風景を愛するようになったその来歴を委くわしく語って、偶然にも自分をして巴里人と江戸の人との風流を比

較せしめた。

ゾラの所論によると昔の巴里人は郊外の風景に対して今日の巴里人が日曜日といえば必ず遊びに出掛けるような熱心な興味を感じてはいなかった。その証拠は時代風俗の反映たるべき文学を見ても、十七、八世紀の文学上には一ツとして今日の抒情詩人が歌っているような「自然」に対する感想を窺う事は出来ない。ルッソ才出^いでて始めて思想は一変し、シヤトオブリアンやラマルチンやユウゴオらの感激によって自然は始めて人間に近付けられた。最初希臘^{ギリシヤ}芸術によって、[divinise] 《デヴィニゼエ》（神らしく）された自然、仏蘭西古典文学によって度外視された自然は、ロマンチズムの熱情によって始めて [humaneise] 《ユウマニゼエ》（人間らしく）せられた。しかしユウゴオやラマルチンはまだ一度も巴里郊外の自然をそが抒情詩の直接の題材にして歌った事はない。それはかの通俗小説の作家として今では最^もう忘れられようとしている Paul 《ポール》 de 《ド》 Kock 《コック》を以て嚆矢^{こうし}と見倣^{みな}さなければならぬ。ポール・ド・コックは何も郊外の風景その物を写生する目的ではないが、今から五、六十年前 Louis 《ルイ》-Philippe 《フィリップ》王政時代の巴里の市民が狭苦しい都会の城壁を越えて郊外の森陰を散歩し青草^{あおぐさ}の上で食事をする態^{さま}をば滑稽なる誇張の筆致を以てその小説中に描いたのである。その時

代から一般の風俗は次第に変わって来てポオル・ド・コックの^{あと}後には画家の一団体が盛に巴里郊外の勝地を^{ばつしやう}跋涉し始めた。今日では誰も知っている彼の^あMeudon 《ムウドン》の佳景を発見したのは自然を写生するために^{クラシック}古典の形式を破棄した [Franc,ais] 《フランスイ》一派の画工である。それからずっと上流の Mantes 《マント》までを^{やぶ}探ったのは Daubigny 《ドオビニイ》である。今まではその地名さえも知らなかったセエヌの河畔は忽ちの間に散歩の人の^{ざつとう}雑沓を^{きた}来すようになって、最初の発見者 Daubigny 《ドオビニイ》はとうとうセエヌ河の本流を見捨てて Oise 《オアズ》の支流を溯って Anvers 《アンヴェール》の遠方へ逃げ込み、Corot 《コロオ》はやつと水溜りや大木の多い、Ville 《ヴェール》 d'Avray 《ダヴレエ》に^{ふるがえつむこうじま}踏み留るようになった。

この記事から^{ひるがえつむこうじま}翻て向島と江戸文学との関係を見ると、江戸の人は時代からいえば巴里人よりもっと早くから郊外の佳景に心附いていたのだ。俳諧師の^{むれ}群は^{ひようたん}瓢箪を下げて江戸東の梅花に「^{やや}稍と、のふ春の景色」を^{こうとう}探つて歩き、^{くらまえ}蔵前の旦那衆は屋根舟に芸者と美酒とを載せて、「ほんに田舎もましば^た焚く^{はしばいまじ}橋場今戸」の河景色を眺めて喜んだ。

最初^{かすい}河水の^{はんらん}汎濫を防ぐために築いた向島の土手に、^{おうか}桜花の装飾を施す事を忘れなかった江戸人の度量は、都会を電信柱の大森林たらしめた明治人の経営に比して何たる相違で

あろう。

巴里の人たちは今でも日曜日には家族を引連れて郊外の青草あおくさの上で葡萄酒を飲む。しかしわれわれの新しい時代は絵のような美しい伝統を破棄するの急務に追われているばかりである。

この二、三日方々から頻しきりに絵葉書が来る。谷川を前にした温泉宿や松の生えた海辺うみべの写真が来る。友達は皆例の如く避暑に出かけたのだ。しかし自分はまだ何処へも行こうという心持にはならない。

縁えん先の萩はぎが長く延びて、柔かそうな葉の面おもてに朝露が水晶の玉を綴つづっている。石榴ざくろの花と百日紅ひやくじつこうとは燃えるような強い色彩を午後ひるすぎの炎天かがやかに輝し、眠むような薄色の合歡ねむの花はぼやけた紅べにの刷毛はけをば植込みうっこんの蔭なる夕方の微風そよかぜにゆすぶっている。单调な蟬の歌とぎれとぎれの風鈴ふうりんの音——自分はまだ何処へも行こうという心持にはならずにいる。

二

モオパッサンの短篇小説 [Les Soeurs Rondoli] (ロンドリ姉妹しまい) の初めに旅行の不愉快

快な事が書いてある。

「……転地ほど無益なものはない。汽車で明す夜といえど動揺する睡眠に身体も頭も散々な目に逢う。動いて行く箱の中で腰の痛さに目が覚める。皮膚が垢だらけになつたような気がする。いろいろな塵が髪と眼の中へ飛込む。すうすう風の這入つて来る食堂車でまずい食事をする。それらは私にいわせると旅行と称する娯楽の嫌悪すべき序開である。」

先この急行列車の序開があつた後には旅館の淋しき。人が一ぱいいながら如何にもがらんとした広い旅館。見も知らぬ気味悪い部屋、怪気な寢床の淋しさが続いて来る。私には何がさて置き自分の寢床ほど大切なものはない。寢床は人生の神聖なる殿堂である。人は生活を赤裸々にして羽毛蒲団の暖さと敷布の真白きが中に疲れたる肉を活気付けまた安息させねばならぬ。

恋愛と睡眠の時間。われわれが生存の最も楽しい時間を知るのは寢床である。寢床は神聖だ。地上の最も楽しく最も好いものとして敬い尊び愛さねばならぬものだ。

それ故私は旅館の寢床の毛布を引捲る時にはいつも嫌悪の情に身を顫わす。ここで昨夜は誰れが何をした。どんな不潔な忌わしい奴がこの蒲団の上に寝たであろう。私

は人がよく後指^{うしろゆび}さして厭^{いや}がる醜^{みにく}い伛僂^{こわ}や疥癬^{ひつツかき}搔^かや、その手の真黒な事から足や身体中はさぞかしと推量されるように諸有^{あらゆ}る汚い人間、または面と向うと蒜^{にら}や汗の鼻持ちならぬ悪臭を吹きかける人たちの事を想像するし、不具者や伝染病や病人の寝汗や、人間の身体の汚いという汚いもの、醜^{みにく}いという醜^{みにく}いものを想像する。

自分が寝ようとする寢床にはそういう醜^{みにく}いものが寝たかも知れぬ、と思うと、私は其^そ処^こへ片足を踏入れるのが何ともいいようのないほど厭^{あえ}である。」

これは無論西洋の旅館の話だ。日本の旅館にはそれに優^{まさ}るとも敢^{あえ}て劣らぬ同じ蒲団の気味悪さに、便所とそれから毎朝顔を洗う流し場の不潔が景物として附加えられてある。

便所の事はいうまい。もしこれが自分の家^{うち}であつたら、見知らぬ人に寝起^{ねおき}のままの乱れた髪や汚れた顔を見せずとも済むものを、宿屋に泊る是非なさは、皺だらけになつた寝衣^{ねまき}に細いシゴキを締めたままで、こそこそと共同の顔洗い場へ行かねばならない。

洗^{あら}場^{いば}の流は乾く間のない水のために青苔^{あおこけ}が生えて、触つたらぬらぬらしそうに輝^{ひか}つている。そして其処^{そこ}には使捨てた草楊枝^{くさようじ}の折れたのに、青いのや鼠色の啖唾^{たんつば}が流れきらずに引掛つている。腐りかけた板^{いた}ばめの上には蛞蝓^{なめくじ}の匍^はた跡がついている。何処^{どこ}からともなく便所の臭^{みなぎ}いが漲^{みなぎ}る。

衛生を重^{おも}ずるため、出来る限りかかる不潔^{おもん}を避けようためには県知事様でもお泊りになるべきその土地最上等の旅館^{ホテル}へ上^あつて大に茶代を奮発せねばならぬ。単に茶代の奮発だけで済む事なら大した苦痛ではないが、一度び奮発すると、そのお礼としてはいざ汽車へ乗つて帰ろうという間際なぞに極^{きま}つて要^いりもせぬ見掛^{みかけ}ばかり大きな土産物^{みやげもの}をば、まさか見る前で捨てられもせず、帰りの道中の荷厄介にと背負^{しよ}い込^こまされる。日本の旅館の不快な事は毎朝毎晩番頭や内儀^{ないぎ}の挨拶、散歩の度々に女中の送迎、旅の寂しさを愛するものにとつてはこれ以上の煩累^{はんるい}はあるまい。

何処へ行こうかと避暑の行先を思案している中、土用半には早くも秋風が立ち初^そめる。蚊遣^{かやり}の烟^{けむり}になお更薄暗く思われる有明^{ありあけ}の灯影^{ほかげ}に、打水^{うちみず}の乾かぬ小庭を眺め、隣の二階の三味線を簾^{すだれ}越^こしに聴く心持……東京という町の生活を最も美しくさせるものは夏であろう。一帯に熱帯風な日本の生活が、最も活^{いき}々として心持よく、決して他人種の生活に見られぬ特徴を示すのは夏の夕だと自分は信じている。

虫籠^{むしろう}、絵団扇^{えうちわ}、蚊帳^{かや}、青簾^{あおすだれ}、風鈴^{ふうりん}、葭簾^{よしず}、燈籠^{とうろう}、盆景^{ぼんけい}のような洒^{しゃ}々たる器物や装飾品が何処の国に見られよう。平素は余りに単白^{たんぱく}で色彩の乏しきに苦しむ白木造りの家屋や居室全体も、かえつてそのために一種いふべからざる明い軽い快感を起させる。

この周囲と一致して日本の女の最も刺※的に見える瞬間もやはり夏の夕、伊達巻の細帯にあら^{ゆかた}い浴衣の立膝^{たてひざ}して湯上りの薄化粧する夏の夕を除いて他^たにはあるまい。

町^{まちじゆう}中^{ちゆう}の堀割に沿うて夏の夕を歩む時、自分は黙阿弥翁^{もくあみ}の書いた『島衛月白浪^{しまちどりつきのしらなみ}』に雁金^{かりがね}に結びし蚊帳もきのふけふ——と清元^{きよもと}の出語^{でがたり}がある妾宅の場を見るような三

味線的情調に酔う事がしばしばある。

観潮楼^{かんちようろう}

の先生もかつて『染めちがえ』と題する短篇小説に、西鶴のような文章で浴

衣と柳橋^{やなぎばし}

の女の恋を書かれた事があつた。それをば正直正太夫^{しやうじきしやうだゆう}という当時の批

評家が得意のCalenbourを用いて「先生の染めちがえは染^{そめ}ちがえなり。」と罵^{ののし}つた事をも私は明治小説史上の逸話として面白く記憶している。

いつぞや（二十三、四の頃であつた）

柳橋^{やなぎばし}

の裏路地の二階に真夏の日盛りを過した

事があつた。その時分知つていたこの家の女^やを誘つて何処か涼しい処へ遊びに行くつもりで立寄つたのであるが、窓外^{まどそと}の物干台^{ものほしだい}へ照付ける日の光の眩^{まぶし}さに辟易^{へきえき}して、とにかく夕風の立つまでとそのまま引止められてしまったのだ。物干には音羽屋格子^{おとわやこうし}や水玉や麻の葉つなぎなど、昔からなる流行^{はやり}の浴衣が新形^{しんがた}と相交つて幾枚となく川風に飜っている。

其処そこから窓の方へ下る踏板の上には花の萎しおれた朝顔や石せき菖しょうやその他の植木鉢が、硝子ガラスの金魚鉢と共に置かれてある。八畳ほどの座敷はすっかり渋紙しぶかみが敷いてあつて、押入のない一方の壁には立派な箆たんすが順序よく引手のカンを并ならべ、路地の方へ向いた表の窓際には四、五台の化粧鏡が据えられてあつた。折々吹く風がバタリと窓の簾すだれを動うごすと、その間から狭い路地を隔かてて向側むかいがわの家の同じような二階の櫺子窓れんじまどが見える。

鏡台の数かずだけ女も四、五人ほど、いずれも浴衣に細帯したままごろごろ寝転んでいた。

暑い暑いといいながら二人三人と猫の子のようにくつき合つて、一人でおとなしく黙もくつているものに戯からいかける。揚句あげくの果に誰かが「髪あたまへ触ふつちや厭いやだつていうのに。」と癩かんし癩やぐこえ声を張り上げるが口喧嘩にならぬ先に窓下を通る蜜豆屋みつまめやの呼び声こゑに紛まぎらされて、一人が立つて慌あわただしく呼止める、一人が柱にもたれて爪弾つまびきの三味線に他の一人を呼びかけて、「おやどうするんだつけ。二から這入るんだツけね。」と訊きく。

坐るかと思うと寝転ぶ。寝転ぶかと思うと立つ。其処には舟底枕ふなぞこまくらがひっくり返つてゐる。其処には貸本の小説や稽古本けいこほんが投出してある。寵愛の小猫が鈴を鳴しながら梯子段はしごを上あつて来るので、皆みんなが落ちていた誰かの赤いしごきを振しやつて戯あそぶ。

自分は唯黙もくつて皆みんなのなす様を見ていた。浴衣一枚の事で、いろいろの艶なまめかしい身の投げ態げま

をした若い女たちの身体の線が如何にも柔く豊かに見えるのが、自分をして丁度、宮殿の敷^{しきがわら}瓦^{つど}の上に集う土耳其美人の群^{むれ}を描いたオリヤンタリストの油絵に対するような、あるいはまた歌^{うた}麿^{まろ}の浮世絵から味うような甘い優しい情趣に酔わせるからであつた。

自分は左右の窓一面に輝くすさまじい日の光、物干台に翻る浴衣の白さの間に、寝転んで下から見上げると、いかにも高いいかにも能く澄^よんだ真夏の真昼の青空の色をも、今だに忘れず記憶している……

これもやはりそういう真夏の日盛り、自分は倉造りの運送問屋のつづいた堀^{ほり}留^{どめ}あたりを親父橋^{おやじばし}の方へと、商家の軒下の僅かなる日陰を扨^よつて歩いて行つた時、あたりの景色と調和して立去るに忍びないほど心持よく、倉の間から聞える長^{なが}唄^{うた}の三味線に聞取れた事がある。

歌は若い娘の声、絃^{いと}は高音^{たかね}を入れた連^{つれ}奏^{びき}である。この音楽があつたために倉続きの横町の景色が生きて来たものか、あるいは横町の景色が自分の空想を刺激していたために長唄がかくも心持よく聞かれたのか、今ではいずれとも断言する事はできない。真正の音楽狂はワグネルの音楽をばオペラの舞台的装置を取除いて聴く事をかえつて喜ぶ。しかしそ

れとは全然性質を異にする三味線はいわば極めて原始的な単純なもので、決して樂器の音^ね色^{いろ}からのみでは純然たる音楽的幻想を起させる力を持つていない。それ故日本の音楽にはいつも周囲の情景がその音楽的效果の上に欠くべからざる必要を生ぜしめるのはやむをえぬ事であらう。

その日は照り続いた八月の日盛りの事で、限りもなく晴渡った青空の藍^{あいいろ}色^{したた}は滴り落つるが如くに濃く、乾いて汚れた倉の屋根の上に高く広がっていた。横町は真^ま直^{ちやう}なようでも不規則に迂曲^{うま}つていて、片側に続いた倉庫の戸口からは何れも裏手の棧^{さん}橋^{ばし}から下る堀割^{おもて}の水^{おもて}の面^{ほら}が丁度^{あな}洞穴^{ほら}の中から外を覗いたように、暗い倉の中を透してギラギラ輝^{ひか}つて見える。荒^{あらぬ}布^ぬの前掛^{あた}を締めた荷揚^{たてがみ}の人足^わが水に臨んだ倉の戸口に蹲^{しゃが}踞^みんで涼んでいると、往來^{おうらい}際には荷車^{おん}の馬^まが鬣^{たてがみ}を垂して眼を細くし、蠅^むの群^むれを追払う元氣もないようにじつとしてゐる。運送屋の広い間口の店先には帳場^{ちやうば}格^{こう}子^しと金庫の間に若い者が算^{そろ}盤^{ばん}を弾^{はじ}いていたが人の出入りは更に見えない。鼠色した鳩^{うま}が二、三羽高慢らしく胸を突出して炎天の屋根を歩いていると、荷馬^{にうま}の口へ結びつけた秣^{まぐさ}桶^{おけ}から麦^{むぎ}殻^{から}のこぼれ落ちるのを何処^{どこ}から迷つて來たのか瘦せた鶏^{ひと}が一、二羽、馬の脚の間をば恐る恐る歩きながら啄^つんでいた。人^{ひと}通^{とお}は全くない。空氣は乾いて緩^{ゆる}に涼^{やか}しく動いている。

自分はいつも忙しかるべきこの横町の思いもかけぬ夜のような寂寥^{せきぱく}と沈滞^{ちんたい}とに、新しい強い興味に誘われながら歩いて来た時、立続^{たちつづ}く倉の屋根に遮^{さへぎ}られて見えない奥の方から勢よく長唄の三味線の響いて来るのを聞いたのである。炎天^{あかる}の明い寂寥^{うち}の中に二挺^{ちよう}の三味線は実によくその撥音^{ばちおと}を響かした。

自分は「長唄」という三味線の心持をばこの瞬間ほどよく味い得た事はないような気がした。長唄の趣味は一^{いちちゆう}中^{きよもと}清元などに含まれていない江戸氣質^{えどかたぎ}の他^たの一面を現したものであろう。拍子はいくら早く手はいくら細^{こまか}くても真直で単調で、極めて執着に乏しく情緒の粘^{ねん}綿^{めん}たる処が少い。しかしその輕快鮮明なる事は俗曲と称する日本近代の音楽中この長唄に越すものはあるまい。

端唄^{はうた}が現す恋の苦労や浮世のあじきなさも、または浄瑠璃が歌う義理人情のわずらわしさをもまだ経験しない幸福な富裕な町家^{ちやうか}の娘、我儘で勝気でしかも優しい町家の娘の姿をば自分は長唄の三味線の音^ねにつれてありありと空想中に描き出した。そして八月の炎天にもかかわらず、わが空想のその乙女^{おとめ}は襟附^{えりつき}の黄八丈^{きはちしよう}に赤い匹田絞^{ひつたしぼり}の帯を締めているのであった。

順序なく筆の行くがままに、最^もう一ツ我が夏の記憶^{こころ}を茲^{ここ}に語らしめよ。

山の手の深い堀井戸の水を浴びようとかいうので、夏は水道の水の生^{なまぬる}温^かきを啣^{かこ}つ下町の女たち二、三人づれで目黒の大黒屋^{だいこくや}へ遊びに行く途中であつた。茂つた竹藪^{こたぢ}や木立の蔭^{こいゑ}なぞに古びた小家^{こいえ}の続く場末の町の小径^{こみち}を歩いて行く時、自分はふいと半ば枯れかかった杉垣の間から、少しばかり草花を植えた小庭の竹竿に、女の浴衣^{ゆかた}が一枚干し忘れられたように下つているのを目にした。

下町でも特別の土地へ行かねば決して見られぬあらい肩^{かたぬき}拔^はの模様の浴衣である。それが洗い晒^{さら}されて昔を忍ぶ染^{そめいろ}色は見るかげなく剥^はげていた。青いものは川端の柳ばかり、蟬の声をも珍^{めづ}しがる下町の女の身の末が、汽車でも電車でも出^で入^いりの不便な貧しい場末の町に引込んで秋雨を聴きつつ老い行く心はどんなであらう……何の気なしに思いつくと、自分は今までは唯淋^{とくしゆ}しいとばかり見ていた場末の町の心持に、突然人間の零落^{れいらく}、老衰、病死なぞいう特^{とく}種^{しゆ}の悲惨^{ひつぱん}を附加^{ふか}えて見^みずにはいられなかつた。

下町の女の浴衣をば燈火^{とうか}の光と植木や草花の色の鮮^{あざやか}な間に眺^{なが}め賞^あすべく、東京の町には縁^{えん}日^{にち}がある。カンテラの油煙^{ゆえん}に籠^こめられた縁^{えん}日の夜の空は堀割に近き町において殊^{こと}に色美しく見られる。自分は毎^{まい}年^{ねん}のようにこの年の夏も東京に居残り^ゐはしまいか。

もう八月も十日近くなつた……

明治四十三年八月

青空文庫情報

底本：「荷風隨筆集（上）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年9月16日第1刷発行

2006（平成18）年11月6日第27刷発行

底本の親本：「荷風隨筆 一」岩波書店

1981（昭和56）年11月17日第1刷発行

※「漢詩文の訓読は蜂屋邦夫氏を煩わした。」旨の記載が、底本の編集付記にあります。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年5月28日作成

2019年12月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夏の町

永井荷風

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>